

テマ制度に関する覚書

中 谷 功 治

は じ め に

テマ制については拙著『テマ反乱とビザンツ帝国』（2016年）の第10章などで論じたことがあるが、本稿ではこの制度の成立過程に重点をおいて再論する。その理由は最近の研究動向にある。とりわけ、ビザンツ軍事社会史が専門のプリンストン大学教授ホルドン John Haldon（国際ビザンツ学会会長）が、近著においてテマ制を皇帝ニケフォロス1世（在位802～11年）と結びつけて論じているからである⁽¹⁾。

20世紀中頃、オストロゴルスキー Georg Ostrogorsky がテマ制について大胆な仮説を提示したことをきっかけに、制度の起源をめぐる論争が展開された。議論の土台となる史料状況が芳しくなかったこともあって、論争は70年代に沈静化したが、1980年頃からシカゴ大学教授のケーギ Walter E. Kaegi, Jr. やベルリン自由大学教授のリーリエ Ralph-Johannes Lilie らによって新たな視点が提示された⁽²⁾。前者による軍事反乱との関連、後者による防衛システムとしての機能などである。これらのテマ（軍団・軍管区）の役割に注目した研究を受けて、90年代にはホルドンは著書『7世紀のビザンツ』⁽³⁾におい

-
- (1) Leslie Brubaker & John F. Haldon, *Byzantium in the Iconoclast Era c.680-850: a History*, Cambridge, 2011, chapter 11. 本書はバーミンガム大学教授でビザンティン美術史が専門のブルベイカーとの共著で、担当箇所区分は明確にはなっていないが、以下、軍事や行政に関する章はホルドンの執筆によるものとして扱う。
- (2) 拙著『テマ反乱とビザンツ帝国』大阪大学出版会、2016年、序章第3節を参照。
- (3) J. F. Haldon, *Byzantium in the Seventh Century, the Transformation of a Culture*, Cambridge, 1990, revised ed., 1997, chapter 6.

てテマ制について一応の概要をまとめた。ところが21世紀になって、パリの高等研究大学院 EPHE の教授ジュカマ Constantin Zuckerman が新たな視点を提示したことが発端となり⁽⁴⁾、ホルドンは先に述べた仮説を採用するにいたったのである。

本稿では、現状におけるテマ制に関する論点まとめ、あわせて史料を確認したうえで、9世紀のテマ行政の確立過程について再考する。

1. テマとテマ制

テマ制とは、教科書で「軍管区制」とも呼ばれる中期ビザンツの軍事行政制度である。教科書での説明は次のようになる。「7世紀以降異民族の侵入に対処するため、帝国をいくつかの軍管区にわけ、その司令官に軍事と行政双方の権限を与えるという軍管区制（テマ制）がしかれる」⁽⁵⁾。この説明でまちがいはないが、ビザンツ史研究で問題とされたのはこの制度がいつ導入されたのかという点であった。

オストロゴルスキーは、テマ制成立の画期を7世紀初頭のヘラクレイス帝期に求めた。彼の説が大きな議論を呼んだのは、イスラム教徒の侵攻以後ではなく、その前のササン朝の攻撃に対応して創設されたと主張したからである⁽⁶⁾。この革新的なオストロゴルスキー説は現在ではほとんど顧みられることはない。教科書の記述からも、テマ制の導入は7世紀中頃以降のイスラム軍の侵攻への対抗措置であったと推測できるだろう。テマ制の成立については、制度は徐々に整備されたとの説が有力である一方、特定の皇帝による英断に起源を求める説も存在している。

ところで、テマとは何のことなのか。じつはテマという用語は古代の古典ギ

(4) Constantin Zuckerman, *Learning from the Enemy and More: Studies in "Dark Centuries" Byzantium*, *Millennium Jahrbuch* 2, 2005, pp.79-135.

(5) 木村靖二他著『詳説世界史 改訂版』, 山川出版社, 2019年, 134頁。

(6) ゲオルグ・オストロゴルスキー (和田廣訳)『ビザンツ帝国史』恒文社, 2001年, 135-7頁。

リシア語には存在しない。テマが登場するのは、中期ビザンツの重要史料『テオファネス年代記』が最初である。『テオファネス年代記』は、ローマ帝政期のディオクレティアヌス帝から 813 年までを年代ごとに記した歴史記述で、7 世紀中頃以降は他史料での並行記述が乏しいだけにその重要度が増す⁽⁷⁾。

『テオファネス年代記』で、テマは 7 世紀初頭のヘラクレイオス帝の治世にはじめて登場する。文脈から判断するかぎり、そこでのテマとは「軍団」を意味していた。もちろん古典ギリシア語にも「ストラトス *stratos*」など軍団を意味する用語は存在した。にもかかわらず、テマという用語が使用されたのはなぜか。残念ながら、理由はよくわからない。

なお、7・8 世紀について『テオファネス年代記』と並行して記述を残した総主教ニケフォロスは、著作『簡略歴史』⁽⁸⁾のなかでテマという用語をいっさい使用していない。「アナトリコイ」や「アルメニアコイ」などの個々の軍団の名前を用いる場合でも、「いわゆる」というただし書きをはほぼ確実に添えている。つまり、テマというのは通称であり、国家の正式な用語ではなかった可能性が高いのである。

さらに『テオファネス年代記』を読み進めていくと、7 世紀の末あたりからテマが一定の領域を示しているケースが増えてくる。具体的には、「オブシキオン」とか「トラケシオイ」とかの軍団名によって、その軍団が管轄する領域が示される。つまり、これは軍管区を示すテマということになるだろう。

ここで注意しておきたい点がある。それは軍団であれ軍管区であれ、テマがいくら登場しても、それらはダイレクトにテマ制の存在を示すわけではない、ということだ。なぜなら、テマ制の定義にあるように、軍団の司令官がその担

(7) 『テオファネス年代記』や編者の修道士テオファネスについては、さしあたり拙著『テマ反乱とビザンツ帝国』の序章第 4 節「史料と考察手法」を参照のこと。cf. C. de Boor (ed.), *Theophanis Chronographia*, vol.1, Leipzig, 1883; Cyril Mango, & Roger Scott (trs.), *The Chronicle of Theophanes Confessor: Byzantine and Near Eastern History, AD 284-813*, Oxford, 1997.

(8) C. Mango (ed./tr.), *Nikephoros Patriarch of Constantinople, Short History*, Washington D.C., 1990.

当領域の軍事だけでなく民事の行政全般を管轄してはじめてテマ制と呼べるからである。

ちなみに、テマと呼ばれる個々の軍団の起源はどこにあるのか。こちらは容易に答えることができる。話は古代のローマ帝政後期にさかのぼる。西暦 300 年頃、ディオクレティアヌス帝とコンスタンティヌス帝が実施した行政改革により、帝国軍は国境に沿って配置された比較的小規模の守備隊と皇帝の信任篤い司令官が指揮する機動野戦軍に大別された。戦略としては、歩兵中心の守備隊が国境線での防衛を担当する一方、大規模な侵入に対しては内地に駐留する騎兵を決戦兵力とする機動野戦軍が迎撃してこれを叩く、というものである。その際、軍事上の防衛体制は地方の行政システムとは別の指令系統となっていた。

6 世紀のユスティニアヌス帝の時代には、機動野戦軍は東方ではアルメニア方面軍とオリエント方面軍、西方ではバルカン半島にトラキア方面軍とイリュリクム方面軍、さらに再征服地のイタリアとカルタゴ地方にも同様の方面軍が展開した。以上に加えて首都近郊には皇帝直属の軍団が最終兵力として控えていた。

これらの軍団のうち、東方とバルカン半島のものがイスラムの攻勢やスラヴ人の侵入に押されて小アジアに撤退してきたものが後のテマ軍団であり、後におのおのが軍管区を形成した。すなわち、アルメニア方面軍がアルメニアコイ軍団、オリエント方面軍がアナトリコイ軍団（ギリシア語で東（オリエント）を意味する「アナトレ」より）、そしてバルカン半島ではイリュリクム方面軍は消滅したらしく、一方のトラキア方面軍は海を渡って小アジア西方のトラケシオイ軍団となった。さらに首都近辺の皇帝直属軍は、紆余曲折の後に小アジア北西部を管轄するオブシキオン軍団を形成した（オブシキオンとはラテン語のオブセキウム「忠誠」より）。さらに、小アジアの地中海沿岸地域には「海のテマ」軍としてキビュライオタイが形成されたが、このテマや艦隊については詳しいことはわかっていない⁽⁹⁾。

(9) 当時の艦隊については拙著『テマ反乱とビザンツ帝国』第 3 章を参照のこと。

ところで、ディオクレティアヌス帝やコンスタンティヌス帝による軍指揮権と行政権は別立てという原則の放棄、つまり指揮官である將軍（ギリシア語でストラテゴス）が両方の権限を掌握した時にテマ制が成立するのであれば、ユスティニアヌス 1 世の没後にアフリカ方面軍の司令官がカルタゴ総督（エクサルコス）として、またイタリア方面軍の司令官もラヴェンナ総督として、すでに民事行政権を委ねられていた。これらはテマ制と呼べるのではないのか。テマという用語の登場以前ではあるが、そう言えなくもない。けれども、研究史上はこれら辺境地域の総督府はテマ制とはみなされず、その後カルタゴは 7 世紀末に、ラヴェンナは 751 年に帝国領から失われた。

結局、テマ制の成立はまずもって小アジアのアナトリコイ、アルメニアコイ、トラケシオイ、オプシキオン、そして海のテマ、キビュライオタイの 5 つの軍団を対象として議論がなされた。各軍団の將軍ストラテゴスたちが民事権をも管轄したのはいつか、誰か皇帝がそのような英断を下したのか。これが 20 世紀後半を騒がせたテマ制起源論争である。なお、オプシキオンだけは司令官は「コメス」と呼ばれた（コメスはラテン語 *comes* に由来する）。

テマ軍団の將軍が行政権をも掌握していたことがわかる史料はあるのだろうか。あるにはあるが、しかし後の 900 年頃の史料となる。皇帝レオン 6 世（在位 886～912 年）が編纂した軍事書『タクティカ』の中に、「將軍は皇帝について彼に従う属州全体について誰よりも大きな権限を有する者である。將軍は彼の指揮下の軍事テマのトップの指揮者であり、皇帝によって任命される」という条項が登場する⁽¹⁰⁾。ではいつそうなったのか。旧来の説では、8 世紀のコンスタンティヌス 5 世（在位 741～775 年）治下に活躍した將軍ミカエル・ラカノドラコンが、管轄するトラケシオイ軍管区で修道士たちを集めて迫害を加えた『テオファネス年代記』の記事⁽¹¹⁾をもって將軍の行政権行使にあたとされてきた。ただし、最近ではこの記述も一時的な例外的措置の可能性

(10) George T. Dennis (ed./tr.), *The Taktika of Leo VI*, Washington D.C., 2010, Constitution 1.9-10, p.14.

(11) *Theophanis Chronographia*, pp.445, 446.

があるとの指摘がなされている。そうすると明確な史料上の証拠は8世紀には見出せなくなる。

2. 『テーマについて』

じつは、テーマに言及する史料は『テオフィアネス年代記』やレオン6世の『タクティカ』以外にも存在する。その題名もズバリ『テーマについて』である⁽¹²⁾。これはレオン6世の息子でやはり文人皇帝として名高いコンスタンティノス7世（単独在位945～59年）が編纂した作品である。この『テーマについて』の序文には次のようにある。

「レオン（6世）の息子、皇帝コンスタンティノス（7世）の、ローマ人たちの帝国に属するテーマ（属州）についての作品。どこから名前を獲得したのか、そしてそれらのテーマという呼び名は何を意味しているのか、またそれらのいくつかのものは昔からのものであり、また他のものは新しい呼び名を獲得したことについて」⁽¹³⁾（カッコ内は中谷による補足、以下同じ）

これだけを見ると、この『テーマについて』を読めばテーマ制の起源が明白になるような気になる。けれども、つづく記述は以下のとおりである。少し長くなるが引用する。

「テーマの名称は、私にはそう思われるのだが、多くの人々が考えるように成立しなかった。というのも、どの名称も古いものではなく、歴史を書く者たちの誰一人として今言われているようにはその名前に言及していな

(12) Agostino Pertusi (ed.), *Costantino Porfirogenito De thematibus*, Vaticano, 1952.

(13) *Ibid.*, p.59.

いからである。むしろかつては、最初是指揮によってそれぞれの部隊（タグマタ）が、また民族によって軍団（レギオネス）が登録されていたのである。ちょうど「四十名殉教者」の軍団が「雷に打たれた（軍団 **legio fulminata**）」と呼ばれ、あるものは「マルマリタイ」（北アフリカ）、またあるものはビシディアの（軍団）やあるいはテッサリアの（軍団）のように別の言い方で呼ばれ、司令官たち（ドックスやヘゲモン）、またしばしばプライポシトス **praipositos** の下にあるように。そしてそれはいつのことかという、皇帝たちが軍隊とともに遠征をなし、そして敵対する者たちにローマへの隷従の軛を課し、服従を拒んで反抗する全世界のほとんどを制圧した時であり、（皇帝たちとは）ユリウス・カエサル、敬うべきアウグストゥス、かの有名なトラヤヌス、皇帝たちのなかでも偉大なるコンスタンティヌスそしてテオドシウス、および彼らの後にキリスト教を、神に対する敬虔さを慈しんだ者たちである。というのも、皇帝が戦場にあるのに将軍が任命されるのはまれなことであり、指揮官や部隊長たちの下で物事はすまされていたからであり、軍務にかかわること全般は皇帝の意向にかかっており、全軍が唯一皇帝だけに目を向けていたからである。皇帝たちが戦場に出ることを止めたときに、将軍たちとテマがその境界を決められた。そしてローマ人の支配権は今日までその中へと置かれた。しかしリビア人へラクレイオスの治世以降、今やローマ帝国は東西において狭まり、（領土を）切り取られた。彼以降に統治した者たちはその支配権を一括して行使することができず、自らの支配と兵士たちの部隊を小さな部分に分割した。そしてギリシア化して父たちのローマ人の言葉を捨てた。というのも千人隊長たちはロンギノイと言われ、百人隊長たちはケントゥリオイと、そしていまや将帥（コメス）たちは将軍たち（ストラテーゴイ）と言われた。というのも、テマという名前自体がテシス **thesis** から名づけられたギリシア語であってローマのものではないのである」⁽¹⁴⁾

(14) *Ibid.*, pp.59-60.

以上からは、コンスタンティノス7世が統治した10世紀中頃にはテマの起源は不明瞭となっていたことが判明する。引用の末尾に出てくる「テシス」は古典期から存在する動詞 *tithēmi*（置く）の名詞形であるが、テマとの関係は不明である。また序文の文面からは、イスラムの攻勢が始まったヘラクレイオス帝の治世が大きな分岐点として認識されていた。

『テマについて』では、序文に続き東方の小アジア級のテマが17、西方のヨーロッパ級のテマが12、合計29の地域について記述がなされる。けれども、その内容は地理的な境界と主要都市名、そして各地域に関連した雑多な地誌情報である。たとえば、序文につづく第1のテマ「アナトリコン」⁽¹⁵⁾を引用すると次のようである。

「かくしてアナトリコン・テマは、そこから太陽が昇る、上方の第一の東（「アナトレ」=オリエント）のものゆえにそう呼ばれるのではなく、ビザンティオンとヨーロッパ地域に住む我々を基準にしてアナトリコンと言われる。一方でメソポタミア、シリア、そして大アジア、そこにはインド人やエチオピア人やエジプト人がある、に住む人々たちにとっては、西のまん中で小アジアと言われる。というのも東方とは、ちょうど我々が述べたように、インド人・エチオピア人・エジプト人およびその他の東方（オリエント）に居住する者たちに属するものであるから。しかしにもかかわらず、テマの名前について私たちが長々と話をしたり、人々に私たちが異なることを語っていると思われぬように、簡潔に真実そのものがどうであるのかを探究することにしよう。かくして今日名づけられているアナトリコン・テマは、5つの民族による全居住地となっていた。というのも、その

(15) 『テオファネス年代記』など当初のテマの名称は「アナトリコイ」など男性複数形で登場する。これは軍団が兵士の集団として認識されていた名残りだと思われる。あえて訳すとアナトリコイとは「東方の人々（兵士たち）」の軍団となる。ところが、10世紀のコンスタンティノス7世の頃になると、テマは軍団名としてよりも地域名として認識されるようになり、テマという中性名詞に合わせて中性単数形（「アナトリコン」など）で表記されるようになっていた。

始まりはメロスという名前と呼ばれている村落都市からであり、イコニオンまではフリュギア・サルタリアと呼ばれる。一方、タウロス（山脈）に向かってイサウリア人たちに隣接している（地域）はリュカオニアと呼ばれる。また海側、つまり南に対してのいわゆる「冷たい山」（地域）は、アッタレイアそのものまでパンフュリアと呼ばれる。また上の内陸地方はピシディアと呼ばれる。そして、アクロイノンからアモリオンまでの地域はフリュギア・パカティアナと呼ばれる。また海に向かってカリアと境界をなしている地域はリュキアと呼ばれる。それで内陸の地でタウロス山脈に接し、カッパドキア地方にまで広がっている（領域）は何であれ「アナトリカ」と呼ばれる。というのも、その地域がアナトリコイ・テマに属しているから。以上がそれゆえアナトリコイ・テマの境界である。東西ではオプシキオンのおわりのメロスに始まり、イサウリアの境界までを境とする。一方、南北では北側にブケラリオンの一部とカッパドキアの始まりから、南側ではイサウリアとキビュライオトン（小アジア南岸の海のテマ）の一部から始まる（以下省略）」⁽¹⁶⁾

以上のような調子である。明らかに、著者はアナトリコンという名前の起源がオリエント方面軍にあることを知らず、テマはこの頃には「属州」という程度の意味以上のものではなくなっていた。残念ながらテマの起源は『テマについて』の記述からは判明しそうにないのである。

3. ジュカマの問題提起と「ウスペンスキーのタクティコン」

21世紀に入り、「はじめに」で紹介したフランス人研究者ジュカマは、「テマ」の概念を7・8世紀に当然のごとく用いて議論してきた従来の研究を批判した。ジュカマが指摘するように、「テマ」は『テオファネス年代記』の7世

(16) Pertusi (ed.), *De thematibus*, pp.60-61.

紀以降の記述においてだけ登場し、それ以外の同時期の史料では確認されない。この事実は『テオファネス年代記』が813年以後の編纂と推測されるだけに意味深長である、と彼は指摘した。この年代記以外の史料で「テマ」が登場する最古のものは、ストゥディオス修道院長のテオドロスの書簡で、その年代は819年である⁽¹⁷⁾。つまり、史料を厳密に取り扱うならば、9世紀初頭以前に「テマ」というものを想定することは適切とはいえないことになる。

さらにジュカマは、考古学系の資料から自説を補強した。9世紀以前の「テマ」の状況を探る際に彼が利用したのが印章資料であった。印章とは当時の国家役人が使用した書類を封印するための道具で、鉛を用いて押された印刻の銘文（役職者名）が史料として活用される。マックスプランク欧州法史研究所教授のブランデス **Wolfram Brandes** による行政史研究⁽¹⁸⁾に依拠しつつ、ジュカマは8世紀に年代確定されている印章を検証した。そこから判明したのは、これら膨大な数のデータには個別のテマ名が登場することはあっても、「テマ」という用語は一切登場しないということであった。

たとえば、「ヘラスのストラテギア」（738/9年）、「キビュライオタイのストラテギア」（739/40年）、「トラケシオイのストラテギア」（741/2年）などの印章が存在する。「テマ」のかわりに登場するのは「ストラテギア」という用語である。従来はこれら軍団名に付随するストラテギアとはテマのことだと理解されてきたが、厳密にはそう断定はできない、とジュカマは主張する。実際、「ストラテギア」の辞書での意味は指揮権・指揮区といったところである。つまり、大まかにはストラテギアは軍管区ということであり、これらの8世紀中頃の印章からはテマ制の成立は確認できないのである。

なお、以上に挙げた印章は、コンメルキアリオスという地方役人、あるいは彼らの管轄するコンメルキアについてのものが多くを占める。このコンメルキ

(17) Georgios Fatouros (ed.), *Theodori Studitae Epistulae*, Berlin, 1992, vol.1, p.566.53 (no.407).

(18) Wolfram Brandes, *Finanzverwaltung in Krisenzeiten: Untersuchungen zur byzantinischen Administration im 6.-9. Jahrhundert* (Forschungen zur byzantinischen Rechtsgeschichte Bd.25), Frankfurt am Main, 2002.

アリオスは、6世紀までは絹織物など官営工房で製作された高級品目の流通・売買を管理していた役人と推測されている。ところが、6世紀後半から8世紀になると、コンメルキアリオスたちは軍隊への兵器・軍装・糧食などの現地調達と分配を担当するようになり、管理する公的倉庫（アポテケ）を任務のための供給基地とした。というのが、ホルドンも含めて最新研究での有力仮説となっている⁽¹⁹⁾。

一方、地方行政制度としてのテマ制の成立を考える上で、重要なメルクマールとなる史料に、宮中晩餐会での席次表「タクティコン」がある。官職名や爵位の序列を明示したタクティコンとは、中期ビザンツ帝国における官職リストと見なすことができる⁽²⁰⁾。

現存するタクティコンの最古のものは「ウスペンスキーのタクティコン」(9世紀前半)⁽²¹⁾として知られる。その序列の冒頭部にはテマの将軍たちがズラリと並ぶ。つまり、この時期のビザンツは、テマ将軍たちが中核にある軍事優位の国家であった。しかも、ほぼ同様の序列傾向は899年のタクティコン、フィロテオスの「クレトロロギオン」においても大きな変化なく確認される。テマ将軍の優位という現象は、彼らが担当する軍団がごく最近の創設であっても変わることはない。アナトリコイとかアルメニアコイなどの個別のテマの重要性とは別に、そもそも地方の統括者という存在そのものが、国家にあって優位を占めていた。なお、「ウスペンスキーのタクティコン」のリストでは、「テマ」にかかわる役職名も登場し、「テマ」が公式に使用されていたことが明らかとなる（後述）。

「ウスペンスキーのタクティコン」のデータは9世紀のどの時点の状況を反映しているのだろうか。本史料の校訂者でアテネ大学教授であったイコノミデス Nicolas Oikonomidès は、イギリスの著名なビザンツ史家ベリー John B.

(19) Brubaker & Haldon, *op.cit.*, chapter 11.; Brandes, *op.cit.*, pp.239-426.

(20) 井上浩一『ビザンツ帝国』岩波書店、1982年、122-4頁。

(21) Nicolas Oikonomidès (ed.), *Les listes de préséance byzantines des IX^e et X^e siècles*, Paris, 1972.

Bury の古典的研究⁽²²⁾を受けて、序文にある「皇帝ミカエル」という文言を重視して「ウスペンスキーのタクティコン」はミカエル 3 世の治下、さらに登場するテマ將軍たちの顔ぶれを詳しく分析して最終的に 842/3 年のデータであると見た。このイコノミデスの説はおおむね通説となってきたが、21 世紀になってこれに疑念を提示したのがセルビアの研究者ジヴコヴィッチ **Tibor Živković** であった⁽²³⁾。

ジヴコヴィッチはテマ・ダルマチアの創設時期など 9 世紀に新たに登場するテマのデータから独自の判断を加え、「ウスペンスキーのタクティコン」に登場する「皇帝ミカエル」とは通説の 3 世でもその祖父の 2 世でもなく、ニケフォロス 1 世の娘婿ミカエル 1 世ランガベ（在位 811～3 年）であると主張した。同じく 9 世紀に新たに創設されたテマの成立時期を検討したホルドンも、ミカエル 1 世説を支持することになった。

ここではジヴコヴィッチの仮説を詳しく検証する余裕はないが、彼のミカエル 1 世期とする説を採用すると、この皇帝の 2 年ほどの治世は、新興のブルガリアの脅威を受けた危機的状況下にあっただけに、「ウスペンスキーのタクティコン」が実際に反映しているのは、彼の岳父ニケフォロス 1 世の末期ということなる。つまり、本史料に記された新しいテマの大半はこの皇帝が創設したものと想定されるのである。

たしかに、ニケフォロス 1 世は小アジアの貧しい住民をバルカン半島側に入植させ、彼らの中から新兵を徴募したことが史料から確認される⁽²⁴⁾。それはあたかも屯田兵的な入植活動であった。それゆえホルドンはニケフォロス帝によるテマ制改革という仮説を採用して、2011 年の著書では 800 年以前にテマという用語の使用を控えるにいたったのである。

ここで「屯田兵」という表現を使ったついでに、高校世界史の教科書にしば

(22) John B. Bury, *The Imperial Administrative System in the Ninth Century*, London, 1911, pp.12-14.

(23) Tibor Živković, *Uspenskij's Taktikon and the Theme of Dalmatia*, Σύμμεικτα 17, 2005, pp.49-85.

(24) 拙著『テマ反乱とビザンツ帝国』第 8 章参照。

しばしば登場する「屯田兵制」という用語について説明しておきたい。『世界史 B 用語集』（山川出版社、2019年）では、屯田兵制は「軍管区制」につづく項目として、「軍管区の兵士に一定の土地保有を義務づけて世襲の農民兵とし、防衛力の充実と地租収入の安定をはかった制度」と説明される。

けれども、ビザンツにおける7・8世紀の兵士徴募の実態はよくわかっていない。しかも、「屯田兵制」という制度が研究史上のどんな専門用語に対応するものなのかもはっきりしない。教科書『詳説世界史』の英語版（2019年）でも、「屯田兵制」には英語訳は付いていない。どうやら使用するのはかなり危うい用語であることはまちがいない。

唯一、屯田兵制との関連が想定される用語に「兵士保有地（ストラティオテイカ・クテマタ）」がある。これは「軍事保有地」と訳されることもあるが、10世紀の皇帝たちが発布した法律（一般にマケドニア朝の土地立法と呼ばれる⁽²⁵⁾）に登場する用語である。そこでは、馬を含めた装備を自弁する兵士を送り出す家は、それを経済的に支えるため一定量の土地（厳格に面積が規定される）をもたねばならず、同時にその安易な売却が禁じられた。これは慣例化していたしくみを法的に定めたものと推測されるが、いつ頃から実施されていたのかはまったく不明である。

ありえる推測としては、7世紀後半以降のどこかの時点で、財政難に陥った国家が兵士たちの給料を十全に支払えず、やむをえず軍務と引き換えに土地を付与した、というものがある。それが後に個人レベルでの軍務が兵士を給養する土地に結びついたのだ、という。ただし、テマ軍の兵士たちが普段は農民であったが、有事には兵士として防衛を担当した、という農兵モデルもこの時代の史料から十分に実証されているわけではない。ともかく、「屯田兵制」という用語から明治期の北海道開拓などのイメージをふくらませるのは危険である。ニケフォロス1世が導入したギリシア本土での入植政策も、かならずしも成功したとはいえないことが史料から判明している。

(25) 井上浩一『ビザンツ帝国』162-9頁。

話をニケフォロス1世治下でのテマ制成立説の検討に戻そう。ここではジヴコヴィッチ説批判の一環として、「ウスペンスキーのタクティコン」の成立年の問題について若干検討しておきたい。私は通説どおりの9世紀中盤の成立を支持する。地方統治制度としてのテマ制の成立について、明確な画期を想定しない漸次的成立説が妥当だと考えるからである。

西暦800年頃、小アジアにはアナトリコイ・アルメニアコイ・トラケシオイ・オプシキオン・キビュライオタイの5つに、8世紀後半創設のブケラリオイ⁽²⁶⁾を加えた6つのテマ（軍団・軍管区）が存在していた。10世紀に編纂された史料『続テオファネス』では、803年に起こったアナトリコイ將軍バルダネスの反乱時に、「アルメニアコイを除いて4つのテマが彼の側についた」⁽²⁷⁾との記述が見られる。これは海のテマ、キビュライオタイを除いての表現であり、9世紀初頭においても小アジアのテマ軍団の数に変化はなかったと推測できる。

これに対し「ウスペンスキーのタクティコン」では、小アジア側にはカッパドキア・パフラゴニア・カルディアの3人のテマ將軍が新たに登場する⁽²⁸⁾。したがってこの史料が示すのは9世紀以降であることは確実である。さらに、821年に勃発した大規模なテマ軍団の反乱、スラヴ人トマスの乱に際して、同じく10世紀の別の史料『ゲネシオスの皇帝列伝』は、アルメニアコイとオプシキオン以外の「すべてのテマ」が蜂起に加わったとしている⁽²⁹⁾。この残り

(26) ブケラリオイはオプシキオンの東部が独立したもので、史料での初出は765/6年である (*Theophanis Chronographia*, p.440)。

(27) Jeffrey Michael Featherstone & Juan Signes-Codoñer (eds.), *Chronographiae Quae Theophanis Continuati Nomine Fertur Libri I-IV*, Boston/Berlin, 2015, (以下 *Theophanes Continuatus* と略記) I.3.3-4, p.16.

(28) Oikonomidès *op.cit.*, p.49. 6, 7, 10. ただし、原史料にはカッパドキア將軍は欠落している。校訂者のイコノミデスは、前後の文脈や後の時代のタクティコンとの関係から、ブケラリオイとパフラゴニアの二つのテマ將軍の間にカッパドキア將軍を補い、以後の研究ではこの修正がおおむね受け入れられている (*ibid.*, p.48, note. 24). 拙稿『テマ反乱とビザンツ帝国』表2 (冒頭 xx)。

(29) Anni Lesmüller-Werner & Hans Thurn (eds.), *Iosephi Genesii Regum libri quattuor*, Berlin/ New York, 1978 (以下 *Genesisios* と略記), II.2.3, p.23. cf. *Theophanes Continuatus*, II.11.32, p.80. なお『続テオファネス』では「全アジア」。

すべてのテマには、上記のカップパドキア・パフラゴニア・カルディアの3つのテマも含まれていたのだろうか。けれども、そう仮定した場合、ニケフォロス1世によるテマ制の導入にもかかわらず、その10年ほど後に新設のテマ軍団3つが反乱に参加したことになる。私は、このような推測には少なからず無理があるように思う。

ちなみに、テマ・カップパドキアが他の史料に登場するのは、『続テオファネス』ではテオフィロス帝の治世であり(830年「カップパドキア將軍」)⁽³⁰⁾、さらにポソンでの会戦(863年)でもその將軍が合流して戦っている⁽³¹⁾。注目したいのは、この戦いの記事には同じく「ウスペンスキーのタクティコン」に記載されたパフラゴニアの將軍⁽³²⁾に加えて、カルシアノンの辺境区司令官(クレイスラルケス)⁽³³⁾にも言及があることである。クレイスラルケス *kleisourarches* とは、元のテマから新たなテマが分離独立する際に、その前段階として設定された辺境区(クレイスラ *kleisoura*)の軍指揮官のことである⁽³⁴⁾。多くの場合、クレイスラルケスは後のタクティコンではテマ將軍に昇格しているのが通例である。ということは、テマ・カルシアノンは会戦時の

(30) *Theophanes Continuatus*, III.26.26, p.172. ただし、アナクロニズムとの指摘もある(J. B. Bury, *A History of Eastern Roman Empire*, London, 1912, p.222. n.5)。

(31) *Theophanes Continuatus*, IV.25.42, p.p.258.

(32) *Ibid.*, IV.25.43, p.p.258. なお、テオフィロス帝の治世831年にベトロナス・カマテロスが帝国艦隊とパフラゴニアのカテパノ(司令官)を率いてハザールに派遣されたとの記事がある(*ibid.*, III.28, 11-12, p.176)。なお、会戦地ポソンは『ゲネシオスの皇帝列伝』ではポルソン(*Genesisios*, IV.15.17-18, p.68)。

(33) *Ibid.*, IV.25.44, p.258; IV.25.80, p.260. 『ゲネシオスの皇帝列伝』ではカルシアノンはテマとして言及されている(*Genesisios*, IV.15.33, p.68)。なおこの戦いでは、アルメニアコイ・コロネイア・パフラゴニア・アナトリコイ・オブシキオン・トラキア・マケドニアの將軍にカルシアノンとセレウケイアの辺境区司令官と4つの近衛連隊が集結した。つまり、この時期までには「ウスペンスキーのタクティコン」に登場しないコロネイア・テマとセレウケイア辺境区も新設されていたことになる。

(34) クレイスラについては、さしあたり以下を参照のこと。cf. Alexander P. Kazhdan et al. (eds.), *The Oxford Dictionary of Byzantium*, 3 vols., New York/Oxford, 1991, vol.II, p.1132. *Oikonomidès op.cit.*, p.55.5 (*kleisourarches*)。

863年頃にテマに昇格の前段階、あるいはその直後にあったと推定できる。そして一方、「ウスペンスキーのタクティコン」にはカルシアノンの「クレイスラルケス」が言及されている⁽³⁵⁾。以上から判断するならば、カルシアノンのテマ昇格が半世紀以上足踏み状態にあったとは考えにくく、「ウスペンスキーのタクティコン」の成立年は811年頃よりも843年頃の方が有力となる。またこのような推測からは、ニケフォロス1世の改革にだけ注目するのではなく、前後の時代をもあわせて考察する必要があることが明らかであろう。

なお、テマは9世紀後半でも国境地域を中心に創設が続いた。先にあげたフィロテオスの「クレトロロギオン」には、新たにコロネイアと上述のカルシアノン⁽³⁶⁾（小アジア側）、ニコポリス・ストリュモン・ダルマチア（バルカン側）、エーゲ海・サモス（海のテマ）などが新たに加わっている⁽³⁷⁾。さらに、10世紀においても小アジア東部の再征服地に小規模な軍事拠点的なテマの設置が継続された。新設のテマの名称は、旧来の軍団名ではなく、いずれもが地理的なものが大多数を占めているのが特徴である。

4. 自生的テマ論

9世紀における地方統治制度としてのテマ制の成立過程について考察する前に、拙著でも述べた井上浩一氏による「テマの自生論」について確認しておきたい。

かつてのテマ制の起源をめぐる論争の基本軸は、特定の皇帝政府の施策とするものと、そのような画期は存在せず、長い時間をかけて成立したという漸次的成立説との対立にあった。このような議論の流れとは別個に、独自の見解を示したのが井上浩一氏であった。井上氏は、軍指揮権と行政権の一致というの

⁽³⁵⁾ *Oikonomidès op.cit.*, p.55.5.

⁽³⁶⁾ なお「ウスペンスキーのタクティコン」には、「カルディアのドゥクス（司令官）」も言及されている（*Oikonomidès op.cit.*, p.53.4）。

⁽³⁷⁾ *Oikonomidès op.cit.*, p.101；拙稿『テマ反乱とビザンツ帝国』表3（冒頭xx）；井上浩一『ビザンツ帝国』128-130頁（表2）。さらに次頁の表を参照。

表 軍団ないしテーマの記載

		7世紀末	Uspenski	Philotheos	『テーマについて』	
東方	アナトリコイ	○	○	○	○	
	アルメニアコイ	○	○	○	○	
	トラケシオイ	○	○	○	○	
	オブシキオン	○	○	○	○	
	キビュライオタイ	△	○	○	○	
	ブケラリオイ		○	○	○	
	カッパドキア		(○)	○	○	
	パフラゴニア		○	○	○	
	カルシアノン		K	○	○	
	カルディア		○	○	○	
	コロネイア			○	○	
	セレウケイア				○	
	セバステイア				○	
	リュカンドス				○	
	オブティマトイ※		○	○	○	
	キプロス				○	
	レオンドコミス				○	
	西方	トラキア	○	○	○	○
		ヘラス	○	○	○	○
		マケドニア		○	○	○
ペロポネソス			○	○	○	
シチリア		△	○	○		
ケファロニア			○	○	○	
テサロニキ			○	○	○	
デュラキオン			○	○	○	
ニコポリス				○	○	
ストリュモン				○	○	
ダルマチア			A	○	○	
クリマタ (ケルソン)			○	○	○	
サモス島				○	○	
エーゲ海			D	○	○	
ランゴバルディア					○	

△：テーマ将軍の存在が不確定なもの **A**：「アルコン」(役人)
K：「クレイスラルケス」 **D**：「ドゥルンガリオス」(提督)
 ※ オブティマトイは、首都近郊の輜重隊の小領域である。

は政府による施策ではなく、テマ將軍たちによる事実上の篡奪行為であったと主張したのである⁽³⁸⁾。この説は、7世紀中頃から8世紀初頭にかけての帝国の危機的状況をふまえると、一定の説得力をもっている。「テマの自生論」を採用するならば、8世紀になっても史料に「テマ」という用語が登場しないことや、当時も建前として旧来の属州にもとづく地方統治システムが存続していたとの情報にも無理なく説明がつく。ちなみに、井上氏はテマ將軍による行政権の篡奪がいつ頃に起こったのか明示はしていないものの、7世紀後半あたりが想定されているように思われる。

私は井上氏の「テマの自生」という考え方を支持したい。ただし、7世紀後半あたりに行政権「篡奪」の時期を設定するには疑問点がいくつか存在する。たとえば、680年のブルガリア遠征の前後にコンスタンティノス4世は、小アジアの軍団を招集した上で新たにトラキアの軍団を設置したらしいこと、また695年のレオンティオスの篡奪事件の際にも彼がヘラス軍団の將軍に任命されたとある。これら以外の情報からも中央政府はいまだ軍事指揮権を掌握していて、テマ將軍たちが行政権を奪取するような契機がこの時期にあったようには見えない。たしかに、小アジアの軍団には不穏な動きが確認されるケースもあるが、最終的には政府はこれをコントロールしていたのである。

ただし、このようなコントロールがきかなくなるのは時間の問題であった。上述の695年に始まる「混乱の20年」⁽³⁹⁾においては、じつに7回も篡奪やクーデタが繰り返され、結果として政府自体がかなりの混乱状態に陥った。時期は特定できないにせよ、717年頃にアナトリコイ軍団のレオン(3世)とアルメニアコイ軍団のアルタバドスの両將軍が蜂起した時、もはや行政権は別立てでという建前は通用しなくなっていた可能性が高いのである。

しかも、レオン3世以降のイサウリア朝の皇帝政権は地方のテマ軍団の軍事力に大きく依存するものであった。首都陥落という最大の危機は脱したものの、イスラム軍がほぼ毎年のように小アジア各地に攻撃・略奪を繰り返す危険

(38) 井上浩一『ビザンツ帝国』第1章3「テマの起源」。

(39) 拙著『テマ反乱とビザンツ帝国』第1章参照。

な状態は継続していた。それゆえ皇帝政府は、事実上解体したに等しい地方の行政組織の抜本的改変は実施せず（その余裕もない）、テマ将軍にその運営を一任（丸投げ？）したのではないか。このようにして帝国に残された国土を防衛することができた。テマ自生説に立脚するなら、テマという用語が国家の公式用語でなかったという事態、『テマについて』においてコンスタンティノス7世がテマの起源を知らず、皇帝による軍指揮権の掌握に動揺が生じた、と述べていることとも符合する。

さらには、一連の「タクティコン」史料においてテマ将軍の序列が相当に高位にあることも、8世紀当時の帝国政府におけるテマ軍団の地位から考えると無理なく説明できる。ちなみに、最上位のアナトリコイ将軍より上位を占めたのは、総主教と総主教顧問官、元老院議長、そして侍従長くらいである。史料情報に厳格なあまり、8世紀には一切「テマ」という用語を使用しないホルドンの姿勢は、やはり極端であると思う。むしろ、時期は不明瞭ながら国家の正式な用語ではない「テマ」（軍団や軍管区として）が8世紀のどこかの時点において人口に膾炙してゆき、9世紀に入って事実上成立していた「テマ」（行政区画として）を皇帝政府が地方行政制度として整備していったということなのだろう⁽⁴⁰⁾。

5. 9世紀における地方行政

繰り返しになるが、従来はテマ制の起源を軍事権と行政権の統合に求めていたのに対し、ホルドンは新たな地方統治制度としてのテマの成立を重視した。つまり、テマが事実上の属州として、ビザンツ国家の統治システムに組み込まれたのが確認できるのはいつか、との視点に彼は立つのである。

前節での考察からは、ホルドンが想定したようなニケフォロス1世によるテマ制の本格導入を想定するには少々無理があることが判明した。実際、私は

(40) ただし、テマ自生説はエビデンスに乏しい。それゆえこの仮説がどの程度説得力をもつか、2016年の著書では可能なかぎりの状況説明を心がけた。

バルカン半島南部での再征服活動を分析して、これとテマの新設との関連性に注目したことがある。そこからはニケフォロス帝の施策は、8世紀末のエイレネ摂政政権を継承する性格が強いことが明らかになった⁽⁴¹⁾。

とはいえ、ニケフォロス1世の治世前後、800年頃から改革が本格化したことにまちがいはない。バルカン半島やその周辺海域での複数のテマの新設がそのことを明確に物語っている。すなわち、マケドニア（8世紀末の可能性もある）⁽⁴²⁾・ケファレニア（810年）⁽⁴³⁾・ペロポネソス⁽⁴⁴⁾が彼の治世での創設が想定される。さらに、続いて9世紀前半にはテサロニキ・デュラキオン（「ウスペンスキーのタクティコン」）が、世紀後半にはニコポリス・ストリュモン・エーゲ海・サモス島（899年のフィロテオスの「クレトロロギオン」、後者2つは海軍）が登場する。

地方行政システムとしてのテマ制の整備、つまりテマの体制内化を井上浩一氏はかつて「テマの改革」と呼んだ。具体的には、①大規模なテマの分割・細分化、②新たな行政区画としてのテマの新設、③新しい戦力としての中央軍を形成する4近衛連隊の編成、④地方の行政単位としてのテマの整備、などが想定される。これらのうち、①と②の概要については先に述べた。本稿の付表から、時代が下るにつれて数を増大させるテマについて確認してほしい。また、③についても拙著のなかで詳述した⁽⁴⁵⁾。以下では、④の行政制度としてのテマの整備について述べていきたい⁽⁴⁶⁾。

(41) 拙著『テマとビザンツ帝国』第5・8章。

(42) *Theophanis Chronographia*, vol.1, p.475.22-23 (monostratēgon eis te tēn Thrakēn kai Makedonian: 801-2年、ただし統合された指揮権はテマの創設を示すものかどうかは定かではない)；p.501.1 (Iōannēs, patrikios kai stratēgos Makedoniās: 813年)。

(43) Friedrich Kurze (ed.), *Annales regni Francorum, inde ab a.741 usque ad a. 829*, (MGH, *Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim* 6), Hannover, 1950, p.130.27 (Paulus Cefalaniae praefectus)。

(44) T. Živković, *The Date of the Creation of the Theme Péloponnēse*, *Σύμμεκτα* 13, 1999, pp.141-155。

(45) 拙著『テマとビザンツ帝国』第6章。

(46) cf. Hélène Ahrwerler, *Recherches sur l'administration de l'empire byzantin aux IX^e-XI^e siècles*, *Bulletin de Corespondance Hellénique* 84, Athènes/Paris, ↗

まず、これまでの研究から判明している点を確認しておこう。ニケフォロス1世の治世に限定しないなら、ここまでの史料からもある程度はテマ行政の発展をあとづけることが可能である。

「ウスペンスキーのタクティコン」では、その序列の後方にテマという用語をとまなう官職がいくつか登場する。たとえば「テマの幕僚長 *komēs tēs kortēs*」⁽⁴⁷⁾などは軍団に所属する上級将校であり、これは軍団としてのテマに関係するものである。一方、「テマのカルトゥラリオス *chartourarioi tōn thematōn*」(複数形)⁽⁴⁸⁾になると事情は違ってくる。カルトゥラリオスとは行政の実務を担当する役職名であり、この場合は軍団での財務・徴募などを担当した。彼はテマ將軍の配下でありながらも、同時に中央政府の軍務長官(ロゴテス・ストラティオティク)の下僚でもあった。つまり、この役職は地方のテマ軍団内で將軍の下にありながらも中央の意向を受けた存在なのである。

さらに「テマのプライトル *praitōres tōn thematōn*」(複数形)という官職名も記載されている⁽⁴⁹⁾。これは「テマ法務官」とでも訳することができる役職であろう。おそらく、中央政府の司法長官 *quaistōr* と結びつく役人と思われる。ただし、テマのプライトルはフィロテオスの「クレトロロギオン」には登場せず、その後テマ担当の法務官は「クリテス」(直訳では判事；複数形クリタイ)の名称で登場する。この判事たちはその後、テマ行政の実質的な責任者へと昇格する⁽⁵⁰⁾。

「クレトロロギオン」と同時期にレオン6世が編纂させた『タクティカ』は、テマの軍務官(カルトゥラリオス)や法務官(プライトル)と並んで、テ

↘ 1960, pp.1-109, rep. in eadem, *Etudes sur les structures administratives et sociales de Byzance*, (Variorum reprint), London, 1971, pp.43-45.

(47) Oikonomidēs, *op cit.*, p.59.3 (複数形)。

(48) Oikonomidēs, *op cit.*, p.59.4 (爵位スパタリオイにしてテマとドゥロムのカルトゥラリオイ；複数形), cf. *ibid.*, p.61.1 (アナトリコイのカルトゥラリオス)；p.61.3 (テマのカルトゥラリオイ；複数形)；p.341.

(49) *Ibid.*, p.53.3.

(50) *Ibid.*, pp.322, 344. cf. *Oxford Dictionary of Byzantium*, vol.2, p.1078 (JUDGE) by Kazhdan.

マ行政を担当する役人としてプロトノタリオス *prōtonotarios* に言及している⁽⁵¹⁾。プロトノタリオスとは直訳すると「筆頭書記官」くらいの意味であり、政府などの様々な部局でこの官職者の存在が知られる。ただし、ここに登場するのは「テマのプロトノタリオス」⁽⁵²⁾である。上にあげたカルトゥラリオスやプライトルと同じく、彼も中央政府の財務長官（サケラリオス）の部局に所属し、より正確には彼の部下の財務担当官（カルトゥラリオス・サケリウ）の下僚であったことがフィロテオスの「クレトロロギオン」から明らかとなる⁽⁵³⁾。

以上のような地方でテマの行政に携わった役人たちはいつ頃から確認されるのだろうか。ここでも頼りになるのが印章史料である。明確な年代は不明であるが、複数の資料が残るテマ名をもつプロトノタリオスやカルトゥラリオスの推定年代は9世紀で、多くは後半とされている⁽⁵⁴⁾。ここからは、この世紀になってテマ領域内における行政の仕組みが整備されたものと考えられる。

ともかく、公式か非公式かは別にして、8世紀に強大な権限を行使したテマ将軍たちであったが、彼らの職権が史料中で明確となる9世紀になると、中央から派遣されたであろう行政官たちによって掣肘を受けはじめた。ここに中央政府と連動するかたちでの中期ビザンツの新しい行政システムが完成を見たのである。

(51) *The Taktika of Leo VI, Constitution 4.33*, p.56. cf. J.Haldon, *A Critical Commentary on the Taktika of Leo VI*, Washington D.C., 2014, pp.159-160.

(52) cf. Cyril Mango (ed./tr.), *The Correspondence of Ignatios, the Deacon*, Washington D.C., 1997, no.7, 8, commentary, pp.169-170 (9世紀中頃に執筆されたであろう両書簡の宛先、ニコラオスはオプシキオンのプロトノタリオスであったと推定される)。

(53) Oikonomidès, *op.cit.*, p.121.6. cf. *ibid.*, pp.155.5; 159.1; 315. さらに「クレトロロギオン」には「テマのエポプタイ(単数形エポプテス)」が登場し(p.113.30)、税務長官(ロゴテテス・ゲニク)の下にあったとある。エポプテスは属州での徴税を担当した役人であろう。

(54) G. Zacos & A. Veglery (eds.), *Byzantine Lead Seals*, vol.1 3 parts and vol.2, Basel, 1972-1985, no.2142, 2321, 3111 (Anatoliki) : no.2270, 2118 (Armeniakoi) : no.2220, 1727, 2324 (Opsikion) : no.2496, 2118, 3214 (Thrakeioi). cf. Eric McGeer, John Nesbitt, and N. Oikonomidès (eds.), *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art*, 6 vols., Washington D.C., 1991-2009.

お わ り に

本稿での考察をもとに、7世紀以降のビザンツ帝国の地方統治体制の推移を、推測をまじえつつ復元すると次のようになるだろう。

7世紀中盤にはじまるイスラム勢力の地中海世界への進出により、かろうじて生き残りはしたものの、ビザンツ帝国は小アジア半島を除く全東方領を喪失した。残された小アジアも、600年あまり続いた平和は終焉を迎え、この後200年にわたりイスラム軍の侵攻を受けることになった。この時代、国家は抜本的な再編を余儀なくされる。小アジアの各地に撤退・移動してきた軍団は、後にテマと呼ばれる領域ごとに防衛を担当したが、7世紀末頃からの「混乱の20年」には、テマ将軍たちが軍事権に加えて行政権をも事実上掌握するにいたった。これを基盤にしてアナトリコイ軍団の将軍レオンは、アルメニアコイのアルタバストスの支援をえて、皇帝レオン3世として即位した。1年間におよんだ首都攻防戦を戦い抜き、彼らはその後四半世紀にわたり小アジアの防衛に尽力した。

この間、西方のバルカン半島では、帝国はまとまった支配を維持することができなくなっていた。東方とは異なり、この地域は4世紀後半からゲルマン人を中心に異民族の侵攻にさらされ、首都コンスタンティノーブルの陸城壁を最後のよりどころとする事態も生じていた。西方領土を回復したユスティニアヌス1世をもってしても状況は改善せず、6世紀後半にはスラヴ人やアヴァール人の侵入があいついだ。帝国が東方での戦役に忙殺される7世紀に入ると、バルカン半島の混乱はいっそう深刻化し、スラヴ人たちはギリシア本土南部にいたるまで移動・入植する事態となった。

状況に変化が見られたのは、ようやく8世紀末のことであった。バルカン半島の北部ではブルガリア国家との対峙が続いていたが、南部ではスラヴ人居住地域の再征服が進んだ。帝国政府はテマ・マケドニア創設を皮切りに、9世紀に入るとギリシア本土に新たなテマを設置していった。効果の程度は不明で

あるが、ニケフォロス1世による入植政策も実施された。

一方、ここまで国家の要の位置にあった小アジアでは、同帝の治世においてもカリフのハールーン・アッラシード（在位786～809年）による攻撃が続いていた。国内では、レオン3世にはじまるイサウリア王朝（717～802年）の諸政権を支えてきた小アジアのテマ軍団が断続的に反乱を繰り返した。8世紀末のアルメニアコイ軍団主導の政権交代に続き、ニケフォロス1世の登極直後にはアナトリコイ将軍トルコ人バルダネスの反乱が起こった。さらに821年から2年以上にわたって、最後の大反乱スラヴ人トマスの乱が勃発する。おそらくこの大乱の平定後になって、バルカン半島と同様に、小アジアでもテマの分割・新設が本格化したものと推測される。

8世紀20年代になると、ビザンツ帝国は対外的にある程度の平和を維持することができるようになった（ただし、クレタ島の喪失は除く）。ミカエル2世（在位820～29年）からテオフィロス（在位829～42年）の治世に、行政区として中央政府のコントロールがおよぶテマ（事実上の属州）が整備されていった。このようなプロセスは、国境地帯を中心にそれ以後も継続された。

以上のように推測することができるだろう。そのプロセスは、叙述史料からはかならずしも克明にはしえないものの、「ウスペンスキーのタクティコン」（843年頃）やテマの行政にかかわる役人の印章史料から確認することができる。

中期ビザンツ帝国の地方統治制度であるテマ制については、かつてその起源ばかりが注目・議論された。けれども、テマ将軍のもとでの軍事と行政の一致というこの制度の最大の特徴は9世紀後半になるまで確認できない。一方、軍隊の指揮官としてのテマ将軍の活躍は10世紀にはあまり目立たなくなる。バルカン半島では首都に近いトラキアがブルガリアとの主戦場となる一方、東方では国境地帯に戦闘地域が限定されたからである。

以上と時を同じくして、テマ領域での社会の階層分化が進展し、大土地所有が急速に拡大したことが知られる。「有力者（デュナトイ）」と呼ばれた事実上の貴族たちの成長である。11世紀にはテマ制の軍政一致の原則は有名無実化し

ていく。このような推移を見ると、独自の制度としてテーマ制が実質的に機能したのは9世紀とその前後の時期であったことになるだろう。このように、テーマ制については7世紀末以降の時代の流れのなかでその生成・発展のプロセスをたどる視点が重要であるといえる。

ニケフォロス1世による改革を強調するホルドンではあるが、彼もまたこの皇帝がすべてを決したというようなイメージで歴史を捉えているわけではないと思う。8世紀後半に徐々に新たな行政システムの根が地方（軍管区）に張りめぐらされるようになり、それが9世紀初頭にテーマ制として明確な形態をとったということなのだろう。この時期、実質上これまでのような強大な権限は制限されていくものの、一連のタクティコン史料に記された官職の序列では、地方を統括するテーマ將軍たちは国家の最重要職として位置づけられていた。それらの情報は、8世紀から9世紀初頭にかけて、ビザンツ国家において彼らが果たした役割の大きさを反映していたのである。